1．2012 年度の事業報告

活動の概要

○2012年度業務計画書

国際常民文化研究機構の活動は、業務計画書に則って遂行される。本年度の業務計画書は、資料編に掲載されており、それを参照のこと。

○2012年度の活動概要

具体的な活動概要については、後述の第１業務、第２業務、第３業務の活動概要報告に譲ることとし、本項では全体的な視点から本機構の活動について総括する。

第１業務は、日本常民文化研究所所蔵資料である漁業制度資料とアチックミューゼアム写真資料のデジタル化を目的としている。４年度目にあたる 2012 年度は、漁業制度資料に関しては、瀬戸内海との関連を考慮し、日本海側の島根県・福井県の筆写稿本について、およそ 1,000 点の詳細目録を取った。絵図類のうち、大型絵図については画像のデジタル化を行った。

アチックミューゼアムにおける写真資料の整理については、男鹿、三面、富山のおよそ 1,000 点について作成を終了した。全 9,000 点の写真資料のうち、ほぼ４分の３の整理が終了したことになる。最終年度である、来年度に整理作業を完成させることを目標としたい。

また、例年同様に冊子『アチック写真』（男鹿、三面、富山）を５号から７号として３冊発行し、さらにデータベースの更新を行った。

アチック写真の整理作業は、第２業務の「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」班と共同して業務を推進しており、2012 年度は愛知県の奥三河と山口県の周防大島を訪ねて、アチックフィルム・写真の現場を確認するとともに、現地の方々にアチックフィルム・写真を紹介した。

第２業務は、５つのテーマのもとに８つのプロジェクト研究班が組織され、調査研究が進められてきた。前年度の共同研究代表者会議で、2009 年度から 2011 年度の３年間は調査研究の期間であり、2012 年度と 2013 年度は研究成果発信の期間であることを確認した。

2012 年度は、４つのプロジェクト研究班が公開成果発表会を行ない、その他の４つのプロジェクト研究班が成果報告書を刊行した。

公開成果報告の方法は、それぞれ工夫がこらされていた。「アジア祭祀芸能の比較研究」班は、アジアの祭祀に関して映像記録を作成しており、映像記録の比較研究という課題を掲げ、「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」グループ（代表高城玲氏）との連携のもとに、2012 年９月 15、16 日、神奈川大学横浜キャンパスにて公開研究会を開催した。つまり、第１日目は、アチックフィルムである「朝鮮多島海」（1936 年）、「パイワン族の探訪記録」（1937 年）を上映（動画と白黒写真）し、二つのプロジェクト研究班の参加者で討議した。第２日目は、2011 年度の現地調査の映像「韓国蝟島送船儀礼調査（2012 年）」「中国ヤオ族送船儀礼調査（2012 年）」をみながら個々の祭祀儀礼について全体討議を行った。

また、「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」のプロジェクト研究班は、12 月８日より９日まで行われた国際常民文化研究機構の第４回国際シンポジウム「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」の２日目に、その第Ⅱ部として公開研究会「ミンゾク研究の光と

影―近代日本の異文化体験と学知―」を開催した。国際シンポジウムとこの公開研究会の内容を関連させていたので、双方の参加者が国際シンポジウムと公開研究会に参加し、活発な意見交換が行われた。

「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」グループと「民具の名称に関する基礎的研究」グループは、「船」の研究で接点があり、2013 年 2 月 16 日に 2 グループによる合同の成果発表会が開催された。

このように、公開成果発表会は、プロジェクト研究班ごとに単独で行われたわけではなく、関連する班と合同で開催したり、国際シンポジウムと共催したりして、有機的な開催方法に工夫が見られた。そのために、一般参加者も多く見られ、研究成果を幅広く公開できたと思われる。

また、もう一つの成果報告の方法として、成果報告書の刊行がある。これは、4 つのプロジェクト研究班がそれぞれ刊行し、『国際常民文化研究機構叢書』として 4 冊のべ 1,000 頁以上の成果報告書が刊行された。

第 3 業務は、3 回の公開研究会と国際シンポジウムが主な活動であった。第 4 回の国際シンポジウムのテーマは、「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」であり、ハルミ・ベフ氏（スタンフォード大学名誉教授）に「多文化社会としての日本とその背景」として基調講演をいただいた。パネル報告として、森幸一サンパウロ大学教授からはペルーの沖縄県人移民地域の発展について、中川裕千葉大学教授からはアイヌ語の現在について、陳天璽民族学博物館准教授からは日本における国際結婚と無国籍子女について、尹健二神奈川大学教授からは在日から見た日本について、工藤正子京都女子大学准教授からは在日ムスリム家族の子育てについて、森茂岳雄中央大学教授からは日本における多文化共生教育についてパネル発表があった。その後の総合討論の時間には、以上の基調講演と 6 名のパネリストの発表を踏まえて、現代の日本における多文化的な側面について多方面から議論が展開された。350 名以上の参加者があり、盛況であった。

2010 年度から継続している新規共同研究は、2012 年度は新規として沖縄県糸満市で新造されるサバニの記録を中心とする板井英伸氏を代表とする「南西諸島における海事文化の歴史的展開と現状」に決まった。

2012 年度における海外研究機関とのネットワーク形成事業は、大きな展開が見られた。例年通り 11 月に開かれる、学術協定を締結している上海海洋大学の国際シンポジウムには、2 名の参加者を派遣した。同じく学術協定のある韓国木浦大学校島嶼文化研究院による島嶼文化研究に関する研究会にも本機構から参加し、合同調査を行った。さらに、2013 年 1 月には、文献資料の整理・成果発信についての方法論に関する研究会を同じく木浦大学校島嶼文化研究院にて行い、日本常民文化研究所が蓄積してきた古文書の整理方法等を伝え、今後の共同調査に向けた準備を進めた。3 月には台湾の台北芸術大学文化資源学院の研究者を招いて、台湾における物質文化研究と共同調査についての研究会を行った。

以上、本機構 4 年目の 2012 年度は、プロジェクト研究班のまとめの時期になり、充実した成果報告が行われるとともに、国際シンポジウムや公開研究会、新規公募研究、国際研究機関とのネットワーク形成と、順調に展開していることが特筆できる。

（小熊　誠）

１）所蔵資料の情報共有化　業務報告

「国際常民文化研究機構」の事業内容のうち、第１業務「所蔵資料の情報の共有化」では、日本常民文化研究所と神奈川大学 21 世紀ＣＯＥプログラムの後継組織である非文字資料研究センター（日本常民文化研究所〈以下常民研〉付置）が所蔵する諸資料を広く社会に公開、提供するため、その情報の共有化と発信を促進することを目的としている。中核となる常民研は、長年の研究活動により日本の歴史・民俗に係わる生活資料を多方面から発掘し、とくに、漁業制度資料調査による筆写稿本の原稿約 30 万枚をはじめ、常民生活絵引原画、アチック写真、民具の全国調査データベース、民族学振興会関係資料など、世界的にも価値の高い諸資料を収集、所蔵している。

第１業務では、こうした諸資料をデータベース化し、国内外の研究者コミュニティに公開、共有化することによって、新たな研究分野の開拓とさらなる研究の進展、深化を図ることになる。本機構の業務開始以後、第１業務は歴史関係資料と民俗関係資料の２つの部門に分かれ、それぞれの担当者が専門性を活かしながら事業を推進してきた。また、2012 年度は、「神奈川大学デジタルアーカイブ」を立ち上げるための準備が進められ、本機構の成果についても順次データベースによって公開していく予定である。以下、2012 年度の業務について、「漁業制度資料」「アチック写真」に分けて報告する。

（田上　繁）

１．漁業制度資料

（１）2012 年度の作業概要

2012 年度も引き続き「漁業制度資料」の目録化を進めるとともに、大型絵図資料についてもデジタル化・目録化を進めた。

一方、「漁業制度資料」の公開にあたっては、1950 年代に調査を行い、資料が採訪された際の旧所有者を特定し、公開にあたっての手続きを進める必要がある。これらの作業も順次進めていく予定である。

（２）2012 年度の作業状況

①　詳細目録の作成

今年度は、島根県・福井県について詳細目録を取る作業を進めた。また今回は、これまで進めてきた瀬戸内海の史料群の中でも、点数が多く、全容を明らかにできていなかった岡山県の「真鍋増太郎家文書」の目録を公開した。その文書群全体の概要と筆写稿本ごとの概要は、以下の通りである。さらに、配架上の問題で作業が進んでいなかった史料群も、このたび目録化できたので、それらの詳細情報も＜脱漏分＞としてとりまとめた。

＜脱漏分＞

稿本番号　1418　岡山縣児島市味野児島市役所文書

57 点。漁業・水産関係文書としては、文政 13 年の横島村ほか２ヶ村間における漁場紛争や、安政４年の上水嶋南手・北手両瀬の漁場紛争などの文書が見られる。また、煎海鼠御請書や魚問屋に関する史料も散見される。この他、漁業関係以外のものとしては、年貢割付や年貢皆済目録など年貢関係をはじめ、勇崎村と黒崎村との水論に関する文書や、川筋堀浚砂捨場設置のための田地譲渡に関する証文などが多く見られる。さらに明治期の土木予算に関する帳簿も含む。

稿本番号　1424 ～ 1435　日生漁業協同組合文書

最終的には、1424 ～ 1429、1432 ～ 1435 が、各 1 点づつ（計 10 点）。1430、1431 が各 2 点づつ（計 4 点）以上の合計 14 点となった。内訳は、漁業権に関する諸書類綴や漁業協定・契約書のほか、明治 9 年の福浦村人民漁業強願一件および、明治 16 年の福浦村との漁場争論に関する書類綴などである。絵図類あり。

真鍋増太郎家文書

文書群概要

真鍋増太郎家文書の筆写稿本は 29 冊（うち 11 冊は「真鍋家文書」と題された稿本）、総点数は 1958 点におよぶ。ただし、筆写稿本のなかには点数を確定しがたい部分もあり、この総点数は、精査の上でいずれ修正する場合もある。

岡山県笠岡の南、瀬戸内海の真ん中に浮かぶ真鍋島の旧家・真鍋家は、近代には増太郎家、正司家、本治郎（龍太郎）家の三家があり、それぞれ「本家」「新屋」「鉄屋」と呼ばれた。真鍋島の中核といえる増太郎家は、近世にはたびたび庄屋役を勤めたため、大量の史料が残されることとなった。研究所所蔵の筆写稿本のうちでも、質量ともに指折りの充実した史料群である。

本史料群を構成するのは、近世の真鍋島の村方文書や支配関係文書、また近世から近代にかけての漁業関係文書、商業関係文書、土地制度関係文書、そして真鍋家関係文書など、まことに多種多様で、さまざまな角度から瀬戸内海地域を研究しうる史料といえよう。いわゆる村明細帳にあたる島の明細帳、宗門人別帳、検地帳などの、村方の基本帳簿も多数含むが、なんといっても竪紙・継紙・切紙などのいわゆる状が大半を占めていることが、その点数を増やす要因となっている。

真鍋増太郎家文書は、真鍋龍太郎家文書や真鍋島漁業協同組合文書などとともに、真鍋島はもとより、広く瀬戸内海域研究に資する非常に優れた史料群であるので、以下に筆写稿本ごとに収録文書の概要を付すことにしよう。

稿本番号　1445　真鍋増太郎家文書

全 90 点。近世の漁業関係史料を中心に収録する。正保 4 年 5 月付「指上申書物之事（紀伊国の者猟網代運上銀のうち 58 匁拝領につき）」（№ 5）、慶安元年 7 月 11 日付「申上候一札之事（紀伊国六郎左衛門六島網代運上分け前願い一札、控）」（№ 3）、寛文 5 年 5 月 2 日付「手形（紀州塩津浦の者 21 人漁稼ぎにつき宗旨請状）」（№ 7）などの比較的古い史料には、紀州塩津浦からの出漁に関する史料が少なからず見出される。近世中期以降には他地域の漁民との漁場出入をめぐる願書や一札が、明治期には塩飽島漁民の漁場貸与願いなどがあり、当海域の漁業を知る良質の史料群といえよう。

稿本番号　1446　真鍋増太郎家文書

全 133 点。ほとんどは年未詳だが、近世の漁業関係史料が多数収録されている。年判明分で注目されるのは、寛文 4 年 2 月 30 日付「（たたき網御法度申付）」（№ 130）、同年 2 月付「御訴訟申上ル覚（鯛漕網魚逃げ散り迷惑につき）」（№ 132）、同年 5 月「（ごち網脇々にて引くよう申触れ）」（№ 131）などであろう。年未詳分の多くは書状類であり、とりわけ真鍋島と北木島との烏賊引網をめぐる出入については、まとまった分量がある。そのほか、六島付近での鯛網出入や、周辺海上での漁師・水主たちの打擲事件などを伝える書状も多い。他の筆写稿本に収録された史料をあわせて検討されることを期待したい。

稿本番号　1447　真鍋増太郎家文書

全65点。近世の山林田畑に関する史料が集められている。正徳６年６月（№266）と享保９年９月（№267）の「備中国小田郡真鍋島御林改帳　ひかへ」をはじめ、御林に関する台帳類、風折松の払下げ願いの類はとくに多い。また、貞享５年正月付「小林覚帳真鍋」（№264）や元禄８年９月付「真鍋島小林草山帳　ひかへ」（№265）など、肥草山である「草山」に関する史料もある。そのほか、弘化２年の本家壽助方から兄の傳右衛門が新宅として分地したさいの「規定証文之事」（№234）ほかの証文類、島内の畑地・屋敷地の質売買証文類などを含む。

稿本番号　1448　真鍋増太郎家文書

全29点。近世初期から明治初期までの漁労関係史料を収録している。もっとも古い史料は寛永21年11月付「当所之網役　請取　覚帳」（№289）で、ついで宝永４年正月18日付「真鍋島船数改帳　ひかへ」（№290）、同年７月付「真鍋島漁猟品々改帳」（№293）などが続き、近世後期には、文政11年２月付「当子船御運上書上帳　ひかへ」（№298）、天保13年２月付「当寅船御運上書上帳　ひかへ」（№299）など、船運上関係の史料が注目される。明治期では、船の売渡証券類が複数点残っている。

稿本番号　1449　真鍋増太郎家文書

全100点。真鍋島の村方文書類、基本帳簿類が多数収録されている。たとえば、いわゆる村明細帳としては、元禄９年12月付「万覚帳　真鍋島（島明細帳、控え）」（№319）、天保４年４月付「御尋ニ付口書上帳（真鍋島明細帳、控え）」（№327）など、五人組帳としては、享保４年３月付「備中国小田郡真鍋島五人組御仕置帳（控え）」（№320）、元文５年３月付「備中国小田郡真鍋島五人組帳（控え）」（№323）などがある。また、真鍋島の宗門人数辻目録、入漁者の宗門請状、住民の縁組にかかわる宗門放手形や送り手形、あるいは縁組のトラブルをめぐる願書類など、宗門改め関係の諸書類も豊富で、真鍋島周辺の人の移動を知りうる史料群となっている。

稿本番号　1450　真鍋増太郎家文書

全109点。この筆写稿本には、主に年貢諸役に関する史料が収録されている。たとえば、元和４年11月吉日付「真鍋島之御［　　］（年貢）帳」（№426）、寛永10年11月晦日付「まなへ島酉ノ御年貢米請取申事」（№427）、（正保元年）「寛永貳拾壱年　真鍋島申御物成請取通」（№440）、正保４年10月20日付「代御物成算用事」（№437）など、近世初期からの年貢請取通帳や算用状などが揃っている。また、寛永18年12月５日付「（小物成年貢・種米の利など七口579匁請取）」（№452）、元禄13年５月17日付「差上ケ申一札之事（海役20石４斗３升６合書付、控え）」（№453）、正徳６年正月付「乍恐書付を以御願申上候覚（五ヶ島猟場妨げにつき海役引下げ願い）」（№456）、元文元年11月付「覚（真鍋島小物成由緒書上）」（№457）、寛保元年３月26日付「御断申上ル口上書（浦方水主役勤役につき六尺給免除口上書）」（№459）、宝暦12年３月付「小物成書上帳」（№463）など、小物成関係の史料も充実している。

稿本番号　1451　真鍋増太郎家文書

全92点。この筆写稿本には、年貢諸役の目録・帳簿類が収録されている。たとえば、寛文６年12月15日付「午之御免割目録」（№527）から元禄10年12月10日付「丑御免割目録　真鍋島」（№553）までの全27通は、真鍋島の年貢割付目録、寛文12年11月晦日付「六島子之御免割目録」（№

554）から元禄 10 年 12 月 10 日付「丑御免割目録　六島」（№575）までの全 21 通は、六島の年貢割付目録である。そのほか、村財政関係では、真鍋島や岩坪村中の村入用帳である「小入用帳」類、文化期の正頭一件や天保期の改革関係の収支を勘定した「小入用帳」類もあり、島の財政構造をうかがうことができる。

稿本番号　1452　真鍋増太郎家文書

全 27 点。延享元年に神尾春央が勝手方の勘定奉行として巡村したさいの書付が数通収録されている。また、「公事方御定書」の流出写本とみられる年未詳「秘書（御定書写し）」（№613）のほか、各種「定書」の写しや高札の写しなどが数点含まれている。

稿本番号　1453　真鍋増太郎家文書

全 99 点。年未詳の近世文書が多く、内容も多岐にわたる。年代の判明するものでは、寛永 12 年７月 11 日付「覚（真鍋島庄屋見立て方心得）」（№706）、同 15 年 11 月 26 日付「（庄屋勤め方心得申入書付）」（№707）、慶安３年７月９日付「仕り上候一札之事（岩坪惣七郎与頭やめさせ出入につき）」（№708）、寛文４年２月 10 日付「六条地引網代まわり法度之事」（№683）などが古く、庄屋や組頭などの村役人に関する書付類、地引網代をめぐる定書が目を引く。また、（延宝８年）４月７日付「覚（殿様より拝領物目録）」（№686）、貞享２年 12 月 14 日付「口上覚（眞鍋家由緒申伝覚、控え）」（№685）、年未詳「乍恐御理り申上候一札（真鍋島付き島・網代などの由来につき口上書、下書き）」（№687）などは、真鍋家の由緒や真鍋島の網代の由来を伝える興味深い史料である。そのほか、天保６年の真字二分判の通用停止や天保通宝の新鋳にかかわる触書、徳川家慶の将軍就任にともなう同９年の諸国巡見使の御用廻状などもある。

稿本番号　1454　真鍋増太郎家文書

全 21 点。享徳２年９月の年紀をもつ「眞鍋先祖継図」（№718）、年未詳「眞鍋殿ゆらい覚事」（№719）、宝暦 11 年３月吉日付「一札之事（眞鍋家子孫心得）」（№723）、弘化３年 10 月付「眞鍋本家暦代霊簿（トビラ「眞鍋歴代霊簿」）」（№726）、明治 10 年２月付「為取換約定書（眞鍋本治郎・宗一郎両家永遠の情好）」（№725）など、真鍋家の系図・由緒や一族の結びつきにかかわる史料が注目される。そのほか、用水溜池や本浦の波戸の普請入用に関する書付や帳簿は、真鍋島に刻まれた歴史を伝える重要な史料である。

稿本番号　1455　真鍋増太郎家文書

全 148 点。近世の真鍋島の生活・生業にかかわる史料が多数収録されている。たとえば、漁業・海業では、延宝元年 10 月 16 日付「申上ル口上書（江戸出船の生鯛船難船口上書）」（№740）、天和元年 11 月 15 日「乍恐申上ル口上書之事（江戸廻り生ヶ船破損口上書）」（№741）など生鯛船（生ヶ船・活船）関係の史料、元禄 14 年 12 月２日付「仕申一札之事（泉州波有手浦へ網日用の入用銀借用願い）」（№748）、年未詳「乍恐口上書ヲ以申上候（五島八駄網へ真鍋島若衆連れ下りにつき）」（№749）、寛政７年５月付「差上申一札之事（大坂川口繰網不猟借銀の懸ヶ合につき）」（№761）など他の海への出漁関係の史料、あるいは天保８年５月付「乍恐以書附御訴訟奉申上候（鞆津関町真鍋屋権右衛門の魚問屋永続願い）」（№767）、年未詳 12 月 13 日付「（鞆津眞鍋屋魚問屋差止めにつき掛合い書状、控え）」（№787）など安芸鞆津（鞆浦）の「魚問屋眞鍋屋」に関する史料などがある。また、そのほか、安永４年３月付「覚（煎海鼠売高増減書上帳）」（№797）を皮切りに、化政期から天保期にかけて、長崎御

用俵物問屋苫屋傳兵衛発給の「仕切覚」が多数収録されている。そのほか、漁業・海業以外では、元禄３年 12 月付「乍恐口上覚（北木島松枝山請負願い）」（№.743）、元禄４年２月４日付「乍恐口上覚（北木島松枝山請負再願い、控え）」（№.746）などの北木島の松枝山の請負い関係史料もみられる。

稿本番号　1456　真鍋増太郎家文書

全 127 点。近世の領収書・勘定書類が多数収録されているが、多くは年未詳である。年代の判明する史料は、承応元年極月 24 日付「請取申酒之手形事（辰の酒礼銀 43 匁書付）」（№.988）、貞享３年３月 26 日付「請取申札銀之事（真鍋島より取替銀丑年分合 300 目）」（№.904）、安永 10 年４月 15 日付「覚（当二月大割先銀 33 匁２分請取）」（№.996）、文政 13 年２月付「覚（粕代銀１貫 100 目 10 ヶ年賦証文）」（№.888）、明治８年４月 11 日付「記（築山そのほか代書料 50 銭受取）」（№.911）の５点だけである。また、年未詳の「覚」だが、亀川屋敏三郎や掛屋又左衛門が発給した浜入用銀請取書は数多い。

稿本番号　1457　真鍋増太郎家文書

全 97 点。ほとんどが年代の判明する元禄期以降の近世文書である。元禄 15 年４月２日付「預り申銀子之事（網人雇賃として銀 220 目預り手形）」（№.1049）、（天保３年）「覚　眞鍋屋権右衛門江貸附銀之控（天保３年改め）」（№.1100）をはじめ、預り手形･借用証文のほか金銭貸借関係の史料が多い。そのほか注目すべき史料としては、難船救助にかかわる正徳２年８月付「（御城米船破船取計方申渡、前欠）」（№.1014）、（正徳５年）７月 15 日付「覚（越前御城米沈船釣揚働船賃銀 800 目手形）」（№.1109）、正保２年９月 22 日付「廻船式目、写し、前欠」（№.1024）、また琉球使節の通行御用をめぐる申年２月付「（琉球人渡海の節心得方浦触れ、写し）」（№.1027）、そして、住民の旅や移動を物語る宝暦 10 年５月付「往来手形（真鍋島はな女四国遍路往来手形、控え）」（№.1017）、安永８年２月付「往来手形之事（真鍋島圓藏ら３人国々巡拝往来手形）」（№.1020）、（明治）「記（安部傳三郎四国巡拝中の逓送費県内割願い）」（№.1029）などがある。

稿本番号　1458　真鍋増太郎家文書

全 113 点。近世の難船浦手形や猟師の扶持方関係の文書が多数収録されている。難船浦手形のうちでもとりわけ目立つのが、正徳５年６月に発生した六島沖で沈船した越前御城米船関係の諸史料である。この筆写稿本だけでも、同年６月 20 日付「差上申一札之事（越前御城米沈船流寄物注進書、控え）」（№.1111）をはじめ 20 点以上の文書があり、稿本番号 1457 に収録されている№.1109 なども合わせると、越前御城米船沈船関係文書はかなりまとまった史料群といえよう。そのほかにも、真鍋島周辺での難船事故、真鍋島の漁師の出漁先での難船事故など、浦手形類は豊富に伝来しており、難船救助・処理の慣行を伝える格好の手がかりとなるだろう。また、延宝７年７月付「殺生留猟師人数帳　真鍋島　ひかへ（永久院逝去につき猟師扶持方人数帳、控え）」（№.1217）など、高位の人物の葬礼や法事にかかわって漁師人数帳が作成されているほか、猟師扶持方請取なども多く残されている。

稿本番号　1459　真鍋増太郎家文書

全 105 点。この筆写稿本には、享保期以降の詫状のほか、願書、内済証文、申渡書などの史料群が収録され、真鍋島の事件簿とでもいうべき一冊となっている。たとえば、海上での喧嘩口論をめぐる天保 14 年６月付「乍恐以書附奉願上候（北木島沖合猟師打擲一件熟談につき吟味御免願い、控え）」（№.1234）、村有林野での盗伐事件を伝える文化元年７月付「一札之事（船梁木として村山盗伐につき詫状）（№.1250）、博奕の流行を推測させる天保９年 11 月付「一札之事（父惣四郎の博奕宿再犯につき

詫状)」(№1263) などが目を引く。そのほか、島の若者中が御制禁の手踊りを催して人集めをしていた事件、酒狂がひきおこした打擲や悪口などの諸事件、女犯をおかした住職を排斥した住民運動など、住民の悩みやさまざまな事件を伝える収録史料は、島の社会史の宝庫ともいえよう。

稿本番号　1460　真鍋増太郎家文書

全 67 点。この筆写稿本には年未詳の近世史料が集められているが、年貢勘定関係の通・手形、宗門改手形などを多数ふくんでいるので、年代推定ができれば、近世真鍋島の基本史料の一部となり得るだろう。とくに、北木島百姓金右衛門らが七兵衛の後任として庄屋役に就いた傳右衛門の弟傳四郎による「分地配当」の疑惑を訴えた戌年５月付「乍恐奉願上口上書（北木島庄屋傳四郎分地配当心得違い願書)」(p.12 ～ 15)、あるいは、入江新田新兵衛が真鍋島へ提出した丑年 10 月 23 日付「戌年御年貢銀請取通」(p.25 ～ 26)、神島外浦・北木島・白石島・真鍋島の惣代として外浦庄屋儀右衛門が笠岡役所に提出した午年９月付「乍恐書付を以奉願上候（替銀納村方四ケ島の初納銀日割願い)」(p.35 ～ 38、39 ～ 42)、年未詳「備中国小田郡真鍋島宗門人数辻目録」(p.104 ～ 106)、年未詳「(人別持高・家内人数改書)」(p.121 ～ 129) などは、島内構造を理解するうえで注目すべき史料である。

稿本番号　1461　(備中小田郡真鍋嶋真鍋増太郎家文書)

３点。近世期の五人組帳や宗門御改帳。享保７年「□（備中ヵ）国小田郡真鍋嶋　御仕置五人組帳」、延享４年「備中小田郡真鍋嶋宗門御改帳」、寛延３年「御仕置五人組帳」。絵図なし。

稿本番号　1462　真鍋家文書

(107 点)。年号が明確なものは数多くないが、ほとんどが近世期の文書と思われる。前半は書状が多い。それらは年代不祥ながら、烏賊引網一件、汐待中に理不尽な振る舞いを受けた真鍋島漁師六三郎の儀に関するもの、下津井村の粂蔵、角右衛門らによる不埒な船働、真鍋島漁師柳蔵の船が破壊された事件など漁場紛争に関連する書状が含まれる。後半は近世後期から幕末頃の煎海鼠の仕切覚が多数を占める。その他、萬覚帳や借用証文のほか、頼母子講銀受け取りや、御年貢ほか代銀相渡に関する覚書などを収める。絵図なし。

稿本番号　1463　真鍋家文書

14 点。漁業関係については、真鍋島と北木島との漁場紛争に関する済口証文など数点が含まれている。但し、断簡的なものが多い。この他にも「宝永四亥年九月　猟場出入　御代官　遠藤新兵衛様御裁許書」とある箱ふた上書が含まれているが、その中身に該当するような文書は、この冊には含まれていないようである。それ以外には、享和年間と天保 13 年作成の年貢皆済目録、真鍋島の寺社の事について書き上げた覚や御用書籍の探索依頼に関する覚などが含まれる。絵図なし。

稿本番号　1464　真鍋家文書

３点。慶応３年の「御定書」の写２点のほか、「秘書」の表題のある御定書の写と思われる縦帳。

稿本番号　1465　真鍋増太郎家文書

（40 点）。本冊後半に収める数点の書状には、真鍋島と神島外浦・内浦間の漁場紛争に関わるものや、真鍋島の船加子が働いた横暴に対する糺問依頼などが含まれる。他方、それ以外の史料は、「備中小田郡真鍋嶋宗門人数辻目録」や御遠見による御検見実施の願書、鉄砲持主についての書上げ、虫害による廻米価格下直の願書、真鍋島御林の風折に関する報告、田方質入れに関する文書など漁業・水産関係に留まらず、多様な内容を持つ文書が収録されている。絵図なし。

稿本番号　1466　真鍋家文書

26 点。近世期（元禄・宝永・正徳・天明）に作成された「年貢皆済目録」「勘定目録」「年貢可納割附」「年貢免定」など、すべて年貢に関する史料。絵図なし。

稿本番号　1467　真鍋家文書

22 点。近世期（元文・寛保・延享・寛延）に作成された「年貢皆済目録」「年貢可納割附」「年貢免定」など、すべて年貢に関する史料。絵図なし。

稿本番号　1468　真鍋家文書

125 点。大半が「覚」や「記」を表題に持つ文書を収める。これらは各種代金請取りをはじめ、浜入用銀受取に関するものである。その他には御廻米代算用や米代請取通が数点見られる。この冊は、基本的には上記のように現金や物品の授受・貸借に関する証文などが多くを占めているが、さらに寺院の普請や供物に関すると思われる史料が見られる。また、変わったところとして、「覚（京都大仏殿勧化銭受取りにつき）」、「ちちみ髪なをす薬（調合品につき書上）」や「歌舞伎役者名等の書上」など異色の史料も見られる。絵図なし。

稿本番号　1469　真鍋増太郎家文書

（59 点）。ほぼ書状である。他に「覚」や「口上代」、「賀」の表題を持つ史料も数点収めている。但し、「覚」は表題こそ具え、内容的にも金銭貸借の覚書であるものの、「密談書」の端裏書を持ち、形式的には書状に近いものである。また、「口上代」は、以前に約諾のあった鶏卵を送付する旨、さらに「賀」も、訪問のお礼と鞆津網屋講加入についての書状である。これ以外の書状では、縁談や誕生祝いとその礼状などを収める。絵図なし。

稿本番号　1470　真鍋家文書

全 87 点。この筆写稿本は明治元年から同 11 年の史料を中心にまとめられている。たとえば、明治８年の茂床島山畑の官有地化をめぐる同 11 年付「御歎願（茂床島山畑払下げ願い、控え）」（p.315 ～ 317）、年未詳「山畑事件御歎願」（p.311 ～ 314）、また真鍋本治郎・宗一郎両家と増太郎家が一族の結束を固めた明治 10 年２月付「為取換約定書（眞鍋本治郎・宗一郎両家和熟約につき）」（p.234 ～ 240）などは、真鍋一族が明治期以降の社会変革に対応していく様子を伝える史料である。明治８年３月付「汐帳　日嘉恵」（p.13 ～ 59）は、仮名文字を多用した文学的表現によって、汐の満ち引きなどに関する経験的知識をまとめたものである（裏表紙に「眞鍋昌雄所持」とあり）。そのほか、御用達の伏見屋定惣が発給した午年５月 18 日付「覚（御用書持参人足一人催促）」（p.176 ～ 177）や、安永～寛政期のものと推測される宗門送手形や養子手形などの雛形 11 点（p.214 ～ 233）など、若干の近世文書も含まれる。船型や茂床島山畑などの絵図あり。

稿本番号　1471　真鍋家文書

全３点。享保７年３月「覚（御仕置五人組帳前書）」（p.2 ～ 34）、寛延３年３月「御仕置五人組帳ひかへ」（p.35 ～ 63）、延享４年３月「備中小田郡真鍋島宗門御改帳」（p.64 ～ 258）。いずれも近世の島の人的構成を知り得る好史料である。

稿本番号　1472　真鍋家文書

全 53 点。天保９年のものと推定される７月５日付「（御巡見様諏訪縫之助等御国廻り御用懸り申達廻文）」（p.6 ～ 13）、戌年８月 24 日付「覚（御巡見様入用・大割勘定等勘定書廻文）」（p.1 ～ 5）、戌年 10 月付「覚（御巡見様入用割につき郡中惣代廻文）」（p.175 ～ 179）など、笠岡役所からの廻状や巡見使入用の収納を請け負っていた伏見屋定惣・定兵衛からの廻状がある。そのほか、年貢銀の収納や郡中入用割にかかわる廻状が多数あり、当地域における公課貢租の収納システムを解明する手がかりとなるだろう。また、正月 26 日付「（阿蘭陀人献上物滞船につき長崎御用廻文、写し）」（p.115 ～ 117）、亥年５月 10 日付「（尾張大納言逝去につき鳴物等停止の御用廻状）」（p.124 ～ 126）など、当時の情報伝達にかかわる廻状も少なくない。真鍋島は留村になっていたことから、これらの廻状・廻文類が多数蓄積したものと考えられる。

稿本番号　1473　真鍋家文書

全７点。真鍋島の検地帳７冊が収録されている。元禄 13 年５月付「備中国小田郡真鍋島御検地水帳」２冊（p.1 ～ 198、199 ～ 212）、宝永７年９月「備中国小田郡真鍋島新畑屋鋪改検地帳」（p.213 ～ 215）、正徳元年９月「備中国小田郡真鍋島新畑改検地帳」（p.216 ～ 234）、宝暦５年８月付「備中国小田郡真鍋島新田検地帳」（p.235 ～ 298）、明和４年４月付「備中国小田郡真鍋島新田検地帳」（p.300 ～ 304）、文化 14 年５月付「備中国小田郡真鍋島新畑検地帳」（p.305 ～ 309）。いずれも真鍋島の土地制度にかかわる基本史料である。

稿本番号　1474　真鍋家文書

全 14 点。そのうち、延宝８年正月 15 日付「島数村堺覚書帳」（p.72 ～ 78）、元禄５年４月付「氏八幡宮建立ニ付寄進銀集帳」（p.10 ～ 19）、元禄９年 12 月 25 日付「万覚書帳　真鍋島　ひかへ」（p.51 ～ 71）、宝永４年８月付「八月十九日大風ニ付畑方破損改帳」（p.5 ～ 9）、文政元年７月 13 日付「先祖代々親類戒名覚」（p.20 ～ 24）、享保５年 11 月付「備中国小田郡真鍋島指出明細帳（控え）」（p.25 ～ 50）の６点は、真鍋島や真鍋家の概要を知りうる好史料である。ただし、79 ～ 83 頁の２点は筆写稿本ではなく文書目録や年表、84 ～ 94 頁の５点は能登国の近世文書の筆写稿本（内３点は「常民文化」名入罫紙を使用）。

1477 ～ 1479　真鍋龍太郎家文書

77 点。元禄頃から明治期の史料を収める。漁業関係については、文化 10 年、大島中村の枝村である正頭（当）の漁師と真鍋島との間で起こった漁場紛争である正頭流網事件、弘化２年の北木島漁師との鯛網相稼一件、いわゆる前ノ瀬鯛網事件関連をはじめとして、元禄６年、鞆西濱猟場出入や文化３年、左柳島と真鍋島の流し網に関する沖合争論などの文書が見られる。この他、宗門手形帳や年貢割付帳・小入用帳、風土記書上帳、流人処分に関する文書など多岐にわたる。

1482 ～ 1483　真鍋漁業協同組合文書

81 点。数例の漁場紛争に関する文書などを収める。その主な内訳は次の通り。神島鉢ノ尻事件(寛政年間)、正頭流網事件（文化 10 年)、備後鞆津出入一件（享和２年)、前ノ瀬鯛網事件（弘化２年)。

２．アチック写真

神奈川大学国際常民文化研究機構では、神奈川大学日本常民文化研究所の所蔵する資料を研究者に公開・共有化し、研究分野を拡大・深化させる目的を目標としている。本稿は、「所蔵資料の情報共有化」における 2012 年度の「アチック写真」の資料整理状況・公開、また、各共同研究班におけるその活用状況の報告である。尚、昨年度までの「アチック写真の整理について」「アチック写真アルバムの現状確認・収蔵作業と資料カード作成」「アチック写真の公開について」については割愛し、「今年度の資料整理成果報告」、「公開写真の利用について」を報告する。

（１）今年度の資料整理成果報告

神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）所蔵のアチック写真（図１）は、昭和初期から撮影され日本・朝鮮・台湾などその数、約 9,000 枚におよぶ。また 30 本を超える 16 ミリフィルム（アチックフィルム）も常民研に所蔵されている（アチック写真・アチックフィルムに関しては前年度までの年報参照)。

図１　アチック写真

今年度も前年度より引き続きアチック写真の「本目録」作成を行った。本目録とは、仮目録で得られた文字情報をもとに、撮影地・撮影日・撮影者に関する情報（台紙に記載がある場合は仮目録の段階で判明している)、出版物などへの掲載の有無、あるいは他の研究機関に所蔵されている同一の写真の情報（常民研所蔵のものとの同定、また追加文字情報の確認など)、常民研所蔵のアチックフィルムの被写体との照合などを行い目録化したものである。またこの本目録作成作業では web サイト上での公開を考慮し、各種の検索に対応するため、写真一枚ごとにタイトルを付している。

今年度本目録作成分は「男鹿」「富山」「三面」の三地域であり（撮影地域による分類）おおよそ 1,000 点ほどが終了した。

写真の公開にあたっては、インターネットを使った web 上での公開のほかに、写真集『アチック写真』を刊行している（図２)。2012 年度までに７冊を刊行した。現地調査の際に活用できるように質問形式としたもの(vol.1･2･4)、特定の地域を網羅的に掲載したもの（vol.3)、追跡調査で得られた詳細な情報を掲載したもの (vol.5･6･7) など、それぞれの編集方針は異なっている。また、専用 web サイトでは PDF 版の提供も行っている（2012 年度分 vol.7 については未提供)。

図２　『アチック写真』

（２）公開写真の利用について

①神奈川大学国際常民文化研究機構・共同研究での利用

◆ 2012 年度

研究グループ２－２．東アジアの民具・物質文化から見た比較文化史

『国際常民文化研究叢書３』、太田心平「写真のマテリアリティ―現代韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論―」に「蔚山洋靴店前で布を売る人々」（目録番号　ア - 61 - 14）、「街中で布を売る人々」（目録番号　ア - 61 - 15）が掲載される（2013 年 1 月 16 日貸出、2013 年 2 月 28 日）。

研究グループ４－１．アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2012 年 9 月 15 日の国際常民文化研究機構成果発表会にてアチックミューゼアムの朝鮮多島海・パイワン調査発表（羽毛田智幸）。（目録番号　ア - 18 - 48 - 1、ア - 63 - 3･4、ア - 64 - 3･10･19･33、ア - 65 - 10、ア - 73 - 4･26･29 - 1、ア - 74 - 4、ア - 78 - 11･18･22、河岡 1 - 6 - 14･15、河岡 1 - 26 - 8、写 1 - 6 - 49、写 1 - 9 - 34 - 2、写 1 - 19 - 2 - 1、写 3 - 24 - 9、写 3 - 41 - 7、写 4 - 2 - 5 - 5、2012 年 9 月 10 日貸出）

②資料閲覧

◆ 2012 年度

人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館（2012 年 8 月 7 日）

民俗展示に関してのアチック写真閲覧。

株式会社アイシーエムケイ（2013 年 1 月 25 日）

NHK BSプレミアム 2013 年 3 月 30 日放送「極上アンティークお宝映像発掘！『ムカシネマ』」で放送される大正、昭和（戦前）の古いフィルムの調査のため、アチック写真、アチックフィルム等、写真・動画資料閲覧。

東北大学　東北アジア研究センター（2013 年 2 月 21 日）

古写真を利用した民俗調査のための事前調査のため、アチック写真、アチックフィルム等、写真･動画資料閲覧。

松戸市立博物館　青木俊也（2013 年 2 月 22 日）

青木俊也『あるく民俗･あるく展示』（神奈川大学評論ブックレット）掲載の写真確認のため､アチックフィルム動画資料閲覧。

③資料掲載等

◆ 2012 年度

新島村博物館『昔の新島・式根島を古写真から見る』展覧会

上記展覧会に展示予定のアチック写真（目録番号　ア - 15、ア - 16、ア - 79、河岡 1 - 7、河岡 1 - 40）複写寄贈（2012 年 4 月 25 日寄贈）。

『武蔵保谷村だより　第６号』（2012 年 7 月）

下保谷の自然と文化を記録する会『武蔵保谷村だより　第６号』、小林光一郎「KYK とエチオピア皇太子」に「市川信次氏送別紀念」（目録番号　ア - 78 - 11）が掲載される（2012 年 6 月 15 日貸出）。

鳥取県立博物館講演会「鳥取県の怪談―動物の怪を中心に―」PowerPoint 上映（2012 年 9 月 9 日）

鳥取県立博物館講演会「鳥取県の怪談―動物の怪を中心に―」において（講演者小林光一郎）、「男鹿のナマハゲ」（目録番号　ア - 47 - 6）が上映される（2012 年 9 月 3 日貸出）。

飯田市美術博物館（2012 年 9 月 15 日～ 10 月 28 日）

飯田市美術博物館の企画展「柳田國男没後 50 年記念企画展　民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信―柳田國男・折口信夫らによる調査研究のあゆみ―」に「下伊那郡神原村伊藤家での記念写真」（目録番号　ア - 22 - 7）、「北設楽郡田口町の馬市にて競り人に囲まれる仔馬」（目録番号　ア - 25 - 18 －1）、「北設楽郡本郷町中在家の花祭湯ばやし」（目録番号　河岡 1 - 29 - 20 - 2）、「花祭見学の一行」（目録番号　ア - 27 - 4）が展示パネルとして使用され、また図録『民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信―柳田國男・折口信夫らによる調査研究のあゆみ―』（2012 年 9 月 15 日刊行）に同資料 4 点が掲載される（2012 年 7 月 5 日～ 8 月 31 日貸出）。尚、写真資料ではないがこの時、常民研所蔵「花祭」（早川孝太郎画）も展示、図録・展覧会チラシに掲載されている。

くびき野メディフェス 2012（第 10 回市民メディア全国交流会）分科会
「市民メディアと映像アーカイブ」PowerPoint 上映（2012 年 10 月 27 日）

くびき野メディフェス 2012（第 10 回市民メディア全国交流会）分科会「市民メディアと映像アーカイブ」において（研究報告者原田健一）、アチックフィルム「谷浜桑取谷」（目録番号　F22）が上映される（2012 年 10 月 26 日貸出）。

『歴史地理研究　799 号』（2013 年 1 月 1 日）

『歴史地理研究　799 号』、榎美香「なぜ博物館に民俗展示があるのか、民俗文化財とは何か。」に「アチックミューゼアム新館の内部」（目録番号　ア - 78 - 12）が『屋根裏の博物館―実業家渋沢敬三が育てた民の学問―』（2002 年横浜市歴史博物館発行）より転載される（2012 年 11 月 14 日転載許可）。

人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館　総合展示第 4 室「列島の民俗文化」（常設展示）
（2013 年 3 月 19 日～）

上記常設展示に展示予定のアチック写真（目録番号　ア - 12 - 36、ア - 56 - 21、ア - 63 - 14、ア - 78 - 12、ア - 78 - 19、河岡 1 - 6 - 6、河岡 1 - 6 - 14、河岡 1 - 6 - 15、河岡 1 - 29 - 3 - 3、河岡 1 - 29 - 14 - 1、河岡 1 - 29 - 25 - 26）、並びに『アチック写真　vol.6』の「アチックフィルム（16 ミリフィルム）写真」（92 頁）の複写寄贈（2012 年 8 月 31 日寄贈）。

2）プロジェクト型共同研究の推進　業務報告

第 2 業務であるプロジェクト型共同研究は、2009 年度から 2011 年度までの 3 年間を調査研究期間とし、2012 年度から 2013 年度の 4 年目と 5 年目を成果報告期間と位置づけた。8 つのプロジェクトがあるが、その半分の 4 つの研究プロジェクトは、研究成果を公開成果発表会という形式で発表することとし、残り 4 つの研究プロジェクトは成果報告書を刊行することとした。この成果報告の方法については、研究プロジェクトの代表者会議で審議し、決定した。

また、各プロジェクト研究に対して、新規の共同研究者を募集した。8 名の応募があり、運営委員会で審査した結果、7 名が採用された。

さらに、本機構の母体、拠点である日本常民文化研究所により本事業との連携も意図した「常民文化奨励研究」の公募事業を行っている。2012 年度も日本常民文化研究所ウェブサイトにおいて公募を行った結果、４件の応募があった。審査の結果、板井英伸氏を代表とする「南西諸島における海事文化の歴史的展開と現状」が採択された。そして、昨年度採択された畠山聡氏を代表とする「奥能登における真言宗寺院の年中行事を中心とした民俗調査―町野結衆寺院を事例として―」の継続申請を審議した結果、２年目の継続を承認した。

研究成果の一つの方法は、公開成果発表会であった。まず、はじめに、「アジア祭祀芸能の比較研究」グループが、「海を越えての交流―民俗、祭祀、芸能の面から―」というタイトルで、2012 年９月 15 日と 16 日に公開の成果発表会を行った。海外からの報告者もあった。次に、「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」の研究グループが、2012 年 12 月８日、９日に開催された国際常民文化研究機構の第４回国際シンポジウム「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」の第２日目に公開の成果発表会を行った。タイトルは、「ミンゾク研究の光と影―近代日本の異文化体験と学知―」として、７名が発表した。発表終了後の質疑応答では、一般参加者からの発言もあり、活発な討議が行われた。「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」グループと「民具名称に関する基礎的研究」グループは、「船」の研究で接点があり、２グループによる合同の成果発表会となった。２月 16 日に開催され、午前の部は「南と北の船―日本列島の船造りの多様性のルーツ―」と題して３名の発表が行われた。午後の部は、「日本の船―技と名称―」として２名の報告が行われた。ミクロネシアのカヌー制作の映像も公開し、参加者は 70 名を超える盛況ぶりであった。

研究成果のもう一つの方法は、成果報告書の出版である。４つの研究グループが成果報告書を出版した。この成果報告書は、『国際常民文化研究叢書』として第１巻から通し番号を付して刊行することとした。叢書の第１巻は、『漁場利用の比較研究』として、同名の研究グループの論文等を掲載した。執筆者は田和正孝研究代表者以下６名で、12 本の文章が掲載されている。一人２本の文章を書いたことになる。第２巻は、『日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究』で、同名研究グループの９名が執筆している。叢書の第３巻は、『東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』で、同名研究グループの共同研究者 12 名が執筆している。叢書第４巻は、『第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学』というタイトルで、同名の研究グループ 10 名が執筆している。同研究グループが、12 月の国際シンポジウムで行った公開成果発表会の内容と重なる部分があるが、口頭発表だけで終わるのではなく、それをきちんと文章化して成果報告書として発刊することで、研究成果をより多くの人々に知ってもらうことになるので、理想的な研究成果の公開方法だと言える。

2012 年度の叢書は、第１巻から第４巻まで、のべ 37 名の研究代表者が、43 本の文章を公開したことになる。４巻の総ページ数は、A4 判で 1,068 ページにのぼる。次年度は、この公開方法を逆転させて、今年度公開研究発表会を行った研究グループは成果報告書の刊行、今年度研究成果報告書を刊行した研究グループは公開研究発表会を行う事になる。

（小熊　誠）

３）事業運営の総合的推進　業務報告

学際的・国際的な共同研究拠点の確立を目指して、昨年度に引き続き機構運営委員会の主導のもとに、諸会議の開催、国際シンポジウム、学術交流、ウェブサイトの整備、共同研究の横の連係の強化等に取り組んだ。

○会議の開催

機構運営委員会を３回（2012 年４月、11 月、2013 年３月）・学内運営委員会 10 回（２月、９月を除く毎月）を開催した。また、共同研究代表者会議を 12 月、２月に行い、研究班相互のネットワークの構築、意見交換を行う機会を持った。

○国際シンポジウムの開催

第４回国際シンポジウムを開催した。第１回「海民・海域史からみた人類文化」、第２回「“モノ”語り―民具・物質文化からみる人類文化―」、第３回「“カラダ”が語る人類文化―形質から文化まで―」に引き続き、第４回「二つのミンゾク学―多文化共生のための人類文化研究―」を 2012 年 12 月に開催した。関連するテーマを課題とする共同研究「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」グループの成果発表会をその２日目に行い、国内外の研究者との討論により、民族学と民俗学の間にある学際的・普遍的諸問題について議論を深めることができた。

○海外研究機関とのネットワーク形成

2012 年度は学術交流に関する覚書を交わしている上海海洋大学、韓国木浦大学校との合同調査・研究を進展させるため、上海海洋大学が主催する国際シンポジウムに引き続き参加し、11 月には韓国木浦大学校島嶼文化研究院による島嶼文化研究に関する研究会に参加し、合同調査を行った。さらに、2013 年１月には文献資料の整理・成果発信についての方法論に関する研究会を行い、日本常民文化研究所が蓄積してきた古文書の整理方法等を伝え、今後の共同調査に向けた準備を進めた。３月には台湾の台北芸術大学文化資源学院の研究者を招いて、台湾における物質文化研究と共同調査についての研究会を行った。

○公開研究会

人文社会系の共同調査・研究の望ましいあり方を引き続き検討するため、2012 年度は、國學院大學研究開発推進機構学術資料館の齋藤しおり氏「折口信夫の歌舞伎絵葉書コレクション」（第７回）、北海道大学大学院の桑山敬己氏「Suye Mura と Village Japan　―英語圏人類学における２つの古典的日本村落研究の比較から学ぶもの―」（第８回）を招いて公開研究会を実施し、３月には台湾の台北芸術大学文化資源学院の王嵩山氏・黄貞燕氏を招いて、「台湾における物質文化研究の現状と課題」をテーマとする研究会を行い、合わせて来年度以降の学術交流に関する意見交換を行った。

（佐野　賢治）